

Title	転換期イギリスにおける先駆的内発的发展論：エドワード・カーペンターの試論をめぐって
Author(s)	稲田，敦子
Citation	聖学院大学論叢，第 25 卷(第 2 号), 2013. 3 : 27-40
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4401
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

転換期イギリスにおける先駆的内発的发展論

——エドワード・カーペンターの試論をめぐって——

稲 田 敦 子

抄 録

本稿は、転換期のイギリスにあって、資本主義の「構造転換」に連動して肥大化した社会関係の中で希薄化していく人間の現実的存在の危機状況をいち早く意識したエドワード・カーペンターの思想形成を検討する。カーペンターの問題意識は、人間存在の精神的基礎としての共同性をめぐる領域において、「機能—役割」的關係から「実体—人格」的關係への再生の可能性をさぐる試みの一つと考えられる。

彼は外的自然のみならず人間の本性を内包させる内的自然が現実的存在感から遊離していくあり方を認識し、さらにその状況に歯止めをかける契機を持ち得なくなる危機感をつのらせたのである。このことから、人間が自己の存在とその基盤がゆさぶられていく状況が検討され、具体的な煙害問題の告発とも相俟って、先駆的な内発的发展論の視座を提示したのである。

キーワード； 共生思想、内発的发展論、近代文明批判、エドワード・カーペンター

序 章

エドワード・カーペンターの主著である“Towards Democracy”は、かつて E. ルイスによって“His major work, has been aptly described as ‘a book which seeks less to establish a point of view than to find personal contacts’”⁽¹⁾ と評されたことがある。こうした「視点を打ち立てるよりも個人的接触を見出そうとする書物」⁽²⁾といわれる背景には、カーペンターの思想形成過程で看過できない人間ひとりひとりのなかにある「共同の生」の重視と自由な個の解放が中核にあったといえよう。それは、カーペンターが‘the demos’または‘cosmic consciousness’とも呼ぶものであり、彼の生きた時代であるヴィクトリア後期のイギリス社会における正統的教義に対する抵抗を個人主義的な形態で表現したものともいえるのである。彼の主張における一水脈として、J. ラスキンによる固有価値論の提起があげられよう。さらに固有価値は単眼的要因ではなく、ストック概念でもあり、

各自の受容能力を媒介として顕在化するものは、多様な複眼的要素となって共同体再編への内発的発展の基底ともなりうるものである。

本稿は、エドワード・カーペンター（1844～1929）の先駆的な内発的発展論をとりあげ、その形成過程および固有価値論との関係を検討することを目的としている。カーペンターは、近代文明社会の根源的な問題を提起し、一貫して非戦の姿勢を堅持したが、そのあり方は、デモクラシーを生活基盤に根付かせる「土民生活」思想を提起した石川三四郎（1876～1956）に多大な影響を与えた。

第1章 転換期におけるヒエラルキーモデルの変化

カーペンターが育ったブライTONは19世紀半ばには鉄道も開通し、海水の衛生的評価が高まったこととも相俟って富裕層の保養地として発展をとげた。しかし一方で『ブライTON・ガゼット』によると炭鉱労働者のストライキがおこり、また、協同組合組織の設立など産業革命後発展してきた工業化の進展がもたらす社会の変化に揺れてもいた。また工業地帯では、機械破壊運動やオーエン主義またチャーティズムの波が高なりをむかえてもいた。カーペンターの生きた時代は、工業化の矛盾が集約的に顕在化した状況と重なり、イギリス史の中で光と影を描く振幅を大きくさせていたのである。

D. キアナダインによると、イギリス史を俯瞰的にみた場合に「1780年代から1840年代までの時期は、かつては目的論者の夢だったが、最近ではポストモダニズムの悪夢に代わっている」⁽³⁾という。産業革命とフランス革命を経て、「順位、序列、地位からなる個人主義的でヒエラルキー的な古い世界を壊して、社会構造と社会関係を転換した。」⁽⁴⁾これらの帰結は、選挙法改正、穀物法の廃止、チャーチスト運動など大規模な国政上の変化となっていくこととなる。1840年以降、近代国家に対する集団的アイデンティティーが生まれてくるが、諸階級は相互に戦うことなく、ヴィクトリア朝中期の「成長した階級社会」として共存していくこととなる。上流階級は敗北したかブルジョワジーに組み込まれて残りの2つの階級は和睦したと論じられることもあり、ヒエラルキーから3つの階級に変わったのか、あるいは再編後2つの階級に変わったのか、論議はわかれるが、いずれにせよ社会的ならびに政治的発展がおこるのである。

ヒエラルキーモデルは、社会的混沌状況や政治的転覆の時代には擁護され再主張される必要が生じてきたのに加え、当時のイギリスではフランス革命の余波を受け、新たな社会秩序観の提唱者としての労働者階級および中流階級が、社会の在り方を模索しつつ発信し始めたのである。その背景には、農業革命および産業革命による農村と都市の経済、生産過程、職業構造、人口と国家の資源との間の基本的な関係に重大な変化をもたらした。人口に関すると、イングランド、アイルランド、スコットランドで急速に2倍からそれ以上に膨張し、特にリヴァプール、マンチェスターなどの諸都市における若年層の膨張は著しく、それに伴う飢餓、抗議、不満はつづいていった。

こうした時代状況における社会の在り方の提言として、一方ではエドモンド・パークの『フランス革命についての考察』が出版され、その返答ともいべきものとしてトマス・ペインの『人間の権利』が1791年に出版された。パークが従来のヒエラルキーを擁護したのに対して、ペインは、社会構造の二極化を指摘し、「腐敗して奢れる支配者の体制と、脅かされて抑圧された多数派」また「税金を支払う者と、税金を受け取りそれで暮す者」さらには、称号は「人間の性格の中に一種の虚栄心を植え付け、人間の性格を墮落させる」⁽⁵⁾ など支配体制への敵対姿勢を明確にした。こうした提起は、ウィリアム・ゴドウィンやウィリアム・ワーズワースなど異分野の人々にも影響を与え、そうした状況下で、ヴィクトリア社会の上層階級の象徴であるようなブライトンでの「応接間のテーブル」での会話に多感な青年期に違和感を覚えていたカーペンターは、ロンドンのケンジントン・ハイストリートに見られる二極化の現実に大きな衝撃を覚えた。

“On one side as you walk along the trottoir stands, in the gutter, a long of the mere outcasts of humanity. . . . Thin, starved, twisted with deceit and degradation, such faces infect one with their own despair. . . . And then on the pavement, jostling each other, wrapped to the chin in furs, goes the highly respectable crowd, ‘stiff with decency and starch’ from which the out-casts are trying to extort a penny. . . . Bred in luxury and ease, they have seldom been called on to make sacrifices for each other. . . . the life of human toil and human fellowship has passed them by; their affectional natures have become dwarfed; their power of sympathy contracted within the four walls of a stuffy respectability.”⁽⁶⁾

転換期のイギリスでは、テラー・フォードの改革に代表される合理化の進行は速度を増していった。それまでの利益が優先されるシステムのもとでは、外在的な自然破壊をもたらすだけではなく、人間の内在的価値をもむしばむ状況が進行することとなる。物を生み出す生産や労働への意欲が低下し、また自己自身への否定的側面が顕現しはじめた人々にとっては、「共同性」が見出せないか、または未成熟の状態に放置されるという事態を引き起こす可能性が増大された。

1866年にカーペンターは、「近代文明の継続について」と題する論文を出している。この時すでに彼の生涯の課題となった文明の問題がテーマとされていたが、その内容については、具体性状況をふまえた問題提起はなされていなかったが、「鮮明に限定される階級へと社会が階層分化を遂げるとき、人間の個性は圧殺され、階級利害の階級的圧政が支配する」⁽⁷⁾ という危惧を提示している。特に階層分化が進み他者への支配が強化されることによって個人の存在が侵されていくことに対する危機意識は強い。彼は国民性のなかに潜む隠れた進歩の原因つまり「活力」をさぐり、その活性化をはかることを求めた。ここではまだその活性化のもたらす過程および結果をめぐる議論はみられないが、「個々人に与えられた自由」と平等の問題は明らかにされている。

第2章 「内的自然」の認識と「固有価値」

第1節 「内的自然」にみる危機意識

カーペンターが問題提起を行い対抗したヴィクトリア社会の正統的教義の一つは、科学と進歩に対する楽観的な信念であった。科学的文明の継続的を信じ、そのことが知性の発展と同義語となっている状況では、自然は規範の源ではなくなり、すべての自然的な存在がそれ自身の本質的価値を奪われていく。カーペンターが指摘した「調和の喪失」状態は、この本質的価値の喪失をも意味するが、その対象は人間と国家の関係にも及ぶことになる。生活の平和的安定と秩序を維持する外的機構としての国家は、本来個人の労働と生産の体系を安定的に維持するためのものであった。しかしこのような国家によって支えられる体系が拡大すればするほど、それは自然と対立した人工的領域の拡大を意味することになり、個人の内的価値からの乖離は大きくなる。しかもこの文化の領域を支配する論理が機械論的なものであるかぎり、それ自身が人間の相互疎外をもたらさざるをえないような構造となる。

この疎外状況に関してカーペンターが警告しているのは、個々人それぞれにおける自己内部の「統一の喪失」である。これは、自己内部において、外的自我と内的自我との不統一という自己意識の中で渦巻く個的状况を見据えることから出てきたものだった。個人の自由な自己決定の余地が各側面から侵食され、縮減されていく中で、自己の性の創造的な運動が変質していく。そしてこの運動の源である生のエネルギーは、方向をかえて、断続的な「硬直」したものになってしまう。いわば、内発的な創造性が喪失した内実のない形態のみが残るのである⁽⁸⁾。これには、カーペンター自身がケンブリッジ大学での聖職フェローを辞するに至るまでの内的煩悶や苦悩も大きく影響している。硬直された静態的な自律は、客体への能動的な関わりにおいて自己を高める主体性を与えることはできない。また、対象知に拘泥する人格は〈我—それ〉の関係のみに生きることになる⁽⁹⁾。この関係の展開過程で、〈自然〉世界に対しての際限ない支配の拡張が人間理性の専横によって進められていった結果、人間自体までもがこの過程に組み込まれることから回避しえぬこととなる。カーペンターは、この硬直性から脱却する自己更新への志向を、〈いのちを失った環境〉の回復と相俟って模索することになったのである。

すでに1820年代なかばに、ロバート・オーエンによって内的環境の問題は提起されていたが⁽¹⁰⁾、カーペンターの視点は、オーエンとは異なる。「人間は自然を超えるように自然によって素質づけられた存在である」⁽¹¹⁾ ことの意味するものは、内にある否定的な要素を止揚し、対立するものとの相関的な関係をも組み込む内的自然を通しての人間と自然との媒介性である。カーペンターは、この内的自然への志向を「人間は、……自身の自由と幸福とを把握し、実現するために、すなわち、自分の意識を外的な可死的な部分から、内的な不死的な部分に転ずるために、……自分の運命につ

いて意識的にならなければならない」⁽¹²⁾ という自己内部への強い認識を基盤として示した。このことは、利己性という特殊性への志向ではなく、個的主観が全体的〈自然〉との合一のうちに存在することを、個人の自律として求められることを意味する。各人が外的な権威や制度によらず、内奥に真理を見だし、それを自己の意志から確信するという自律への志向を、彼は「社会のなかでコミュニティに向かう運動と内なる野蛮すなわち自然運動」という二つの試行を通じて調和を取り戻す努力を進める中で探ろうとしたのである。

こうした「内的自然」を認識し、心奥の核ともいうべきものからの発信を思考の射程に入れたカーペンターには、かねてからその実験的コミュニティ設立に関心を持っていたラスキンによる「固有価値論」が基底にあると推察される。カーペンターがケンブリッジ大学のフェローの職を辞し、「平民の講師」として郊外のミルソープで自然をも組み込んだコミュニティを立ち上げるときには、土地の選定をも含めて、ラスキンの創設したセント・ジョージ・ギルドに大いに触発されていた。このことは、カーペンターによるホイットマン宛の書簡からも明らかである。

“in a month I hope to be at look out in the country near here—at first on some land of Ruskin's.”⁽¹³⁾ カーペンターとホイットマンとの関係は、ケンブリッジ時代に遡る。はじめは『草の葉』を読み、慰めと励ましを受けたとあるが、その後に出版されたホイットマンによる『民主主義の展望』に「新思想の鉅脈」を見出すほどの衝撃を受け、自分自身が抱いていた聖職者としての従来からの疑問に拍車をかけることとなった。カーペンターは、自身のこうした心境をかなり詳細にホイットマン宛の書簡に綴っており、新しいコミュニティについてのラスキンとの関係も率直に示されている。

カーペンターが言及しているラスキンが創設したギルドは、「生命なしに富はない」という指導原理のもとに設立された。しかし、その組織の在り方には、カーペンターも疑問を抱くように、内容はかなり中世の騎士団や僧院的な有り様がみられた。ラスキンは、シェフィールドに近いトリーに約 13 エーカーの農場を購入したが、これはシェフィールドの相互扶助協会の要請によって、会員 12 名で構成し、農業の共同作業とともに、いずれは先達ロバート・オーエンのように教育施設の建設も考えていた。カーペンターはラスキンに直接手紙を書き、シェフィールドでの組織そのものを対象とはしていないが、ラスキンが進めていたヴェニス・サン・マルコ寺院修復基金の一部に寄付もしている。しかも具体的な自分の身分を明かさなかったことがラスキンからの返書で窺い知ることができる。

“I cannot guess, from yours what position of life you are in—though I see you to be a gentleman and scientific, &c in ‘connection’ with Cambridge—but what not? But it is curious you don’t tell me more, and that you should have worked with me so long without telling me so much!”⁽¹⁴⁾

ラスキンによるギルドが創設されたシェフィールドは、この地域の産業が芸術家的な職人氣質を育てるように思われたからであり、ラスキンは後にウォークリーに工芸作品を陳列する博物館を開

設したが、こうした試みも地域での社会教育活動への一歩となるものであった。しかし、その組織運営の内実は厳しく、内部紛争より頓挫することとなる。カーペンターは、組織内容そのものより、ラスキンによる固有価値の問題提起に影響をうけていたのである。

第2節 「固有価値論」

ラスキンによる固有価値の定義は、物の内在的な潜在能力を評価するとともに、また科学の応用による利用可能性の問題を重視する。さらに人間の生の発達に貢献する性質を重視し、科学と並んで物が持つ芸術文化性を提起し、芸術文化性を固有価値の享受能力の問題と関連づけたことに特性がみられる⁽¹⁵⁾。

ラスキンは『ムネラ・プルウェリス』（1872年版）において、固有価値論を提起した。まず、価値一般について「『価値』とは生命を保持する物の力ないし『役立ち』を意味し、常に二重のものである、すなわち第一義的には固有（intrinsic）であり、第二義的には有効（effectual）である。」⁽¹⁶⁾ ここで示されているのは、固有価値と有効価値という二つの概念である。「固有価値とは任意のものが有する生命を支える絶対的な力である。一定の質と重さをもった一束の小麦はその内部に人体の実質を維持するための計量可能な力を持ち、一立方フィートの清らかな空気は体温を維持するための決まった力を持ち、また美しい花の草群は感性と心を活気づけ励ます活字網力を持つ。」⁽¹⁷⁾ ここで提起されている固有価値とは。固有価値それ自体は、人間にさきだつもの、つまり人が使用する以前に独立して存在するものであり、それゆえ「絶対的な力」である。こうした価値が人間にとって重要な価値であるとともに、それが「役立ち」であると述べられる。ラスキンは、「人々が小麦なり空気なり草花なりを拒もうと見くびろうと、それはこれらのものの固有価値には少しも影響するものではない」⁽¹⁸⁾ と説明し、さらに固有価値の力を解説して、「そのもの自体の力は、それが使用されるかどうかにかかわらず、その内部に存在しており、その独自な力はそのほかのいかなるものにも存在しないものである」⁽¹⁹⁾ と論を進めた。

さらに、固有価値と享受能力の関係を明らかにすることにより、物に備わる固有価値が人間の受容能力を通じて顕在化し有効価値となる。そのためには、「それを受容する者に一定の状態が必要である。食物・空気あるいは草花が人間にとって十全の価値となりうるためには、人間の消化機能・呼吸機能・知覚機能が完全でなければならない。それゆえに、有効価値の生産はつねに次の二つの要件を含んでいる。まず本質的に有用なものを生産すること、次にはそれを使用する能力を生産することである。固有価値と受容能力とが相伴う場合には『有効』価値、つまり富が存在する。固有価値と受容能力のどちらかが欠ける場合には、有効価値は存在せず、つまりは富が存在しない。」⁽²⁰⁾ 物の内在的な性質は、人間の心身の諸機能が発達しなければ享受できないのであり、享受力の発達が固有価値の生産と並行して進まなければ、本来の意味が含意する生の豊かさまた生の充実はない⁽²¹⁾。

また、こうした提起のなかで、固有価値が人間の受容能力を媒介として顕在化するものは単一なものではなく、多様性に富むものとみなされなければならない。それは受容能力次第で、固有価値の引き出され方に違いが生まれるともいえるのである⁽²²⁾。

第3章 内発的發展論の前段階としての試論

第1節 カーペンターによる‘holy individualism’

カーペンターの初期に書かれた論稿である“Art and Democracy” (Progressive Review, 1896) では、各個人がそれぞれ異なるのは、自然の全体をそれぞれ違った方向で、自分のなかで総括するからである、と述べられている。つまり、人が同じ思考を異なる視点から見るためであるという論旨をもって、彼の主張の核ともなる‘holy individualism’を提示することとなった。これは個人の意識や生活態度の変革を第一義的に考え、その前提のない組織的集团的社會解放の行動を信頼しないという志向のあらわれといえるが、現実的には、固有価値論を提示したラスキンによるギルドが構成員の内紛のために存続できなくなったことを目の当たりにして、従来からの思いを強めたと言える。

ラスキンのコミュニティでは、シェフィールドや周辺でそれぞれ固有の職業に従事し、時間をさいて農場で共同作業を行い、共同の生産物がある種の合理的な方法で分配していた。しかし、そうした共同作業に携わる各人の職種による違いからおこる行き違いや、まとめ役との土地の買い付けをめぐる祖語から、“Peace and fraternity were turned into missiles and malice.” (「平和と友愛が、飛び道具と敵意へと変わった」)⁽²³⁾とカーペンターが記す状況に陥ってしまった。

“The wives entered into the fray, and the would-be garden of Eden became such a scene of confusion that Ruskin had to send down an ancient retainer of his (with a pitchfork instead of a flaming sword) to bar them all out.”⁽²⁴⁾

ラスキンによる固有価値論では、物の内在的な潜在能力を評価するとともに、人間の生の発達に貢献する性質を重視し、科学と並んで、物がもつ芸術文化性を提起し、芸術文化性を固有価値の享受能力の問題と関連づけたことであった。さらにラスキンが固有価値をとりあげる際に注目したことは、個別の財だけではなく、土地や地域そのものの固有性を取り上げ、分析しようとしたことである⁽²⁵⁾。

前章で検討したように、ラスキンは固有価値が有効なものとなるには、それを受け取る人の側における一定の状態、すなわち享受能力が必要であることを重視している。物の内在的な性質は、人間の心身の諸機能が発達していなければ享受することができないため、享受能力をもつ人間の発達が固有価値の生産と並行して進まなければ本来の意味である生の充実はありえないと指摘する。

こうした問題提起をうけて、地域における異業種間の疎通をはかりつつ、自然をも組み込んだコ

コミュニティの設立をカーペンターはめざすこととなったが、これは現代的課題ともなっている内発的發展論の先駆的事例ともいえよう。

第2節 先駆としての内発的發展論

カーペンターが大学を辞し、地方単位の組織をシェフィールドではじめる時期は、イギリスの「大不況期」の只中であり、多くの失業者示威運動の最たるものが1886年2月8日のウェスト・エンド暴動であった。彼らの行動に対して統制がきかなくなり、一部の者が不法行為に出たことから暴動となったのである。こうした時期に、ウィリアム・モリスと対応を協議していたカーペンターは、新しい組織を作る目的として「相互に手を差しのべ、遠からず国中に網の目を張りめぐらし、事実上、旧社会の枠のなかで〈新社会〉を作り上げ、やがてそれが旧社会にとって代わる」⁽²⁶⁾ 希望を強く抱いた。またそれとともに教育の必要性を説くこととなり「私のいう教育には、日常的、組織的な相互交渉が必要である。(中略)だから私は、我々に同意するすべての者、個人、地方組織あるいは中央のそれにたいし、名前だけの独立を放棄し、独立の実体をかちとるべく我が連盟に参加するよう」⁽²⁷⁾ 訴えた。

こうしたカーペンターによる試論は、異なる地域に起こりつつある方向性をもった社会変化の事例にもとづいて、抽象度の低い理論化から出発しようとする試みである内発的發展論の先駆的事例といえよう。鶴見和子によると「内発的發展とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を達成するであろう社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上すべての人々および集団が、衣・食・住・医療の基本的必要を充足し、それぞれ個人の人間としての可能性を十分に発揮できる条件を作り出すことである。それは、現在の国内および国際間の格差を生み出す構造を、人々が協力して変革することを意味する。そこへ至る経路と、目標を実現する社会の姿と、人々の暮らしの流儀とは、それぞれの地域の人々および集団が、固有の自然生態系に適合し、文化遺産（伝統）に基づいて、外来の知識・技術・制度などを、照合しつつ、自律的に創出する。」⁽²⁸⁾ 内発的發展論では、地域を分析の単位とし、その際、「地域」を「定住者と漂泊者とが、相互作用することによって、新しい共通の紐帯を創り出す可能性をもった場所」⁽²⁹⁾ とした。さらに地域または集団における世代から世代への伝統を継承する型として、「意識構造の型」「社会関係の型」「技術の型」の3つの側面における「伝統の再創造」の重要性を提起した。その担い手を「キー・パーソンとしての地域の小さき民」であるととし、「内発的發展の事例研究は、小さき民の創造性の探究である」⁽³⁰⁾ ことを明示した。

カーペンターは、その後イギリスの郊外ミルソープで地域にねざした組織づくりを実践するために自然との共生もあわせもつ「産業の村」というコミュニティを設立した。それは、ラスキンが創設したコミュニティ運営の望まざる内部対立における集団および人間関係から学んだことを実践に生かしたものでもある。カーペンターの問題意識は、日本の「冬の時代」に非戦の姿勢を表明して

いた石川三四郎に大きな影響を与え、石川による「複式網状組織」の提起として表明されることになる。石川は、ヨーロッパに亡命中、ミルソーブにあったカーペンターのコミュニティを実際に訪ねしばらく生活をともにすることから、新しい共同体再編の試みを体験した。とくに「複式網状組織」で強調されたことは、各々の網をつなぐ結び目となる核の部分であり、現代の内発的发展論におけるキーパーソンの果たす役割を先駆的に提示していたといえよう。

第3節 固有価値論との関係性

固有価値論をめぐる問題は、主体の問題にあわせて、文明の個性的継承の視点から地域の個性と内発的发展および地域の固有価値を相互に生かしあう発想にてんかいされていくものである。物の内在的な性質を強調することは、その性質がほかのものにはないある種の「個性」を有していることを顕在化させることである。物の個性およびその多様化は、人間が自然科学の知識を応用して物の固有性を生かす力量が発達するほど分業が多様化されて、物の個性について選択する可能性は拡大される。そこでは、「すべてのものが、その内在的価値（their intrinsic worth）に従って評価されるし、いかなるものもその費用や希少性のゆえにのみ評価されることはない、また、いかなる種類の流行も存在する余地はないだろう。」⁽³¹⁾ この固有価値をめぐる個性と多様性を認識することが、個における内発性ととともに、内発的发展の可能性の契機となるであろう。

近代文明の構築が加速化するなかで、きわめて多岐にわたるいわば「人工環境」が創造されていく過程は、なんらかのかたちで自然を改変し、自然状態から脱却して「人間的な自然」を人工的に作り出す軌跡となってきた。近代化が推進されるにつれ、社会システムは発展し、高度化していくが、それによって従来の生活基盤はおびやかされ、ときには解体される危険にさらされる。また肥大化した社会関係の中では、個的な存在はまわりの状況に封じ込まれ、その結果として、人間の現実的存在感は希薄となっていくこととなる。時代とともに、文明が生み出す多種多様な技術が個々の生活レベルに蓄積されるようになり、「人口の累積とともに経済活動がしだいに成熟するようになってくると、自然に対する人間のかかわり方がよりいっそう功利的になり、自然環境と人工環境がしだいに敵対関係に入りこんでいく。」⁽³²⁾ 都市生態系が自然生態系と多くの点で共通性をもちながらも、やはり基本的に異なっているのは、環境に対する人間の主体的な働きかけが重要な要因をなしている。「発展とは、すべての人間のパーソナリティの可能性を実現することを目指し、貧困と失業をなくし、所得配分と教育機会とを均等にすることである。」⁽³³⁾ と提起したダドレー・シアーズは、いわば外的環境の発展への視座とともに、各個人の内面の主体性に目をむけた内発的发展の可能性を明らかにした。

このことは、シアーズの「新しい発展の意味」の論稿で、社会的・人間的意味を包括した自助概念の提起でより明確となった。すなわち、経済面では自給率をたかめ、文化面におけるそれぞれ固有性の尊重し、その促進をめざし、このことを実現するためには自助努力が必要であり、内発的に

自己を内面からたかめていくという志向がしめされている。この視点は内発的発展論の「もう一つの発展」として、外的な発展にたいしての人間の内的な発展を強く推し進める自助と共生の提示となるものであった。

ここでは、より多くのものを生産することを主眼とした物質面での発展に対峙して、各個人の「自立性の高まりと他者との調和、他者への奉仕」が提起されており、「真の意味での文明は、欲望をたえず増幅することにあるのではなくて、むしろ欲望を決然と、意志の力で減少させることにある。このことによってのみわたしたちは、真の幸福や満足感を増大させることができる。」⁽³⁴⁾ ということに集約されるであろう。この主張はものづくりと消費文明に行き詰まり、自然環境と人工環境が敵対関係に入りこんでいく状況への厳しい警告となっている。このような警告を世界の工場として近代化を推進したイギリスにあって、すでに20世紀に入る以前に先駆的に出された問題提起をエドワード・カーペンターの試論に見るのである。

終章

1915年に出版された *The Healing of Nations and the Hidden Sources of Their Strife* では、‘class-disease’ という言い方をして、一階級が共通の利益に従わず、自らの益とその行使のみを求めて行政権力までをも奪うならば、それはまさに病気になるのと同様であるとみなしたのである。「社会的疾病」は、身体の病気と同じく、掠奪階級があり寄生状態があり、つまりは調和の喪失となって精神的「疾病」状態にかかっているのであると指摘する。こうした「社会的寄生群による組織の消耗」は、「個人間の闘争、他を侵害するあらゆるものの異常な発達」と不可欠であった。そこでさらに彼が指摘しているのは、個々人それぞれにおいて、自己がその統一体として自分そのものである状態から、自己矛盾や自己撞着などにより自らの中での「統一の消失」をきたすという状態として、「疾病」をとらえていた点である。彼は、語源的に“health, whole”と“holy, heal”は、同じ語源から出ているということをも参考としてあげ、自己内部の問題性を押し出して、外的自我と内的自我の不統一という二重の自己意識の中で渦巻く個的状况をみすえて提示した。この個々人のいわば内的葛藤およびこのことの要因となった組織内部での問題性をその時点でとりあげたところに彼の姿勢が明らかにされていると言えよう。

カーペンターはまた同著において、第一次大戦下において、ミルが指摘した状況が現実となっている厳しい事態を述べている。

“The truth is that affairs of this kind—like all the great issues of human life, love, politics, religion, and so forth, do not, at their best, admit of final dispatch in definite views and phrases. They are too vast and complex for that. It is, indeed, quite probable that such things cannot be adequately represented or put before the human mind without logical inconsistencies and contra-

diction. But (perhaps for that very reason) they are the subjects of the most violent and dogmatic differences of opinion. Nothing people quarrel about more bitterly than politics—unless it be religion: both being subjects of which all that one can really say for certain is—that nobody understands them.”⁽³⁵⁾

カーペンターは、危機意識の表明にとどまらずに、人間の本来あるがままの自然的状態を無視した「作為的な」社会と理性とを批判し、人間的自然の全体性の回復を基礎にして社会的自然が危機に瀕している状況の克服を目指したのである。この構想は、危機回復のユートピア的構想としてではなく、むしろ現実の国家主義・全体主義とそれを支える諸思想に対する批判的対応によって提示されることとなる。彼は、「制度と慣習の巨大な多様性」を確認し、国家の介入、官僚制の強化を排除して、それらの「負」の側面を見据えつつ、新しい理想を探究しながら古いものの外皮を漸次脱ぎ捨てていくことにより、公共の良心を覚醒させるプロセスを思い描いていったのである。このプロセスを進展させる内的な生の創造力を、彼は、「共同の生」として、その意識の覚醒と成長を自然との相互媒介性を進める中で促進していこうとしたのであり、現代における普遍的課題を射程に入れている。

また、シェフィールドでの煙害問題を初めて公表して対応を求めるなど社会的活動においても発言の場を広げたが、その思考過程にあったのは、固有価値論を基底とした先駆的な内発的發展論といえよう。

註

- (1) Edward Lewis, *Edward Carpenter: An Exposition and an Appreciation* (1915) p. 290
- (2) 都築忠七『エドワード・カーペンター伝—人類連帯の預言者』晶文社 1985 p. 17
- (3) J. Vernon, *Political and the People: A Study in English Political Culture, c. 1815-1867* (Cambridge 1993) 参照 デヴィッド・キャナダイン, 平山雅博, 吉田正弘訳『イギリスの階級社会』日本経済評論社 2008 p. 101
- (4) デヴィッド・キャナダイン, 平山雅博, 吉田正弘訳『イギリスの階級社会』日本経済評論社 2008 p. 102
- (5) 前掲書 pp. 102-103
- (6) Edward Carpenter, *Commonweal*, 20 April 1890
- (7) Edward Carpenter, *Towards Democracy* (1st ed.), London, 1883, pp. 21-22
- (8) 参照 加藤宗幸「エマソンとカーライルと形式と」『北九州大学文学部紀要』第42 1990
- (9) 住吉雅美「マックス・シュティルナーの近代合理主義批判」(3)『北大法学論集』第42巻6号1992 p. 154
- (10) 永井義雄『ロバート・オウエンと近代社会主義』ミネルヴァ書房 1993 p. 19
「人間は二重の創造により形成される。一つは、出生に先立つもので、霊妙な力を持ち、しかも肉体的にも精神的にもそれ以上に霊妙に組み合わせた神秘的な、神による組織化である。もう一つは、それに付け加わる第二の新しい創造であって、主として成人が働きかけて第一の創造を現世で成人にいたらしめることである。」
- (11) Vgl. Spaemann, R., *Handbuch Philosophischer Grundbegriff*, Munchen 1973, Bd. 4, S. 965 参照 拙著『共生思想の先駆的系譜—石川三四郎とエドワード・カーペンター』木魂社 2000

- (12) Edward Carpenter, *Civilization: Its Cause and Cure*, London, 1889, p. 48
- (13) Edward Carpenter to Walt Whitman, 12 July 1874, Traubel, *With Walt Whitman in Camden I*, Boston, 1906, p. 161
- “My dear friend, it is dawn, but there is light enough to write by, and the birds in their old sweet fashion are chirping in the little college garden outside. My first knowledge of you is all entangled with that little garden. But that was six years ago; so you must not mind me writing to you now because you understand, as I under-stand, that I am not drunk with new wine. All that you have said, the thoughts that you have give us, are vital—they will grow—that is certain. You cannot know anything better than that you have spoken the word which is on the lips of God today. I wish I could tell you what is being done by them every where in private and in public. The artisans too are shaping themselves. While money is capering and grimacing over their heads they are slowly coming to know their minds they come to the sense of power to fulfill them: and sweet will the day be when the toys are wrestled from the hands of child-ren, and they too have to become men.”
- (14) A letter from J. Ruskin to E. Carpenter, 27 July 1879
- (15) 池上淳『生活の芸術化』丸善ライブラリー 1993 p. 129
- (16) J. ラスキン 木村正身訳『ムネラ・ブルウェリス』関書院 1958 p. 39
- (17) 前掲諸 p. 39
- (18),(19) 前掲書 p. 40
- (20) 前掲書 p. 39
- (21) 池上淳『生活の芸術化』丸善 1993 p. 133
- (22) 二宮厚美「人間発達とコミュニケーション」『神戸大学発達科学部研究紀要』7-3 2000 p. 190
- (23),(24) E. Carpenter, A Minstrel Communist; Common-weal, 9 March 1889
- (25) 池上淳 前掲書 pp. 131-133
- (26) E. Carpenter, ‘William Morris’ “Freedom” 1896, 12
- (27) E. Carpenter, *Commonwealth*, 1886, 3 (都築忠七『エドワード・カーペンター伝—人類連帯の預言者』晶文社 1985 p. 87)
- (28) Dag Hammarskjöld Foundation, *Que Faire?* 1975, p. 35 参照 西川潤「内発的発展論の起源と今日的意義」鶴見和子他編『内発的発展論』東京大学出版会 1989
- (29) 鶴見和子「内発的発展論にむけて」鶴見和子『内発的発展論の展開』東京大学出版会 1996 p. 15
- (30) 前掲書 p. 16
- (31) 前掲書 p. 18
- (32) 合田周平『エコパラダイムの時代』丸善 1993 p. 81
- (33) Duddley Seers, “The Meaning of Development”, *The Institute of Development Studies at the University of Sussex*, December, 1969
- (34) Sulak, Sivaraksa, *Sisamese Resurgence: A Thai Buddhist Voice in Asia and a World of Change Asian Cultural Foarum on Development, Bankok*, 1985, pp. 95-97 (鶴見和子『内発的発展論』p. 45 参照 岩村沢也「内発的発展論の視座」『国際経営・文化研究』Vol. 1 1996)
- (35) Edward Carpenter, *The Healing of Nation*, 1915, pp. 9-10
- “There are different divisions of human activity, and it is quite natural that those individuals whose temperament calls them to a certain activity. —literary or religious or mercantile or military or what not—should range themselves together in a caste or class; just as the different functions of the human body range themselves in definite organs. And such grouping classes may be perfectly healthy provided the class so created subordinates itself to the general welfare, if it pursues its own ends, usurps govern-mental power, and dominates the nation for its own uses—if it

becomes parasitical, in fact—then it and the nation inevitably become diseased; as inevitably as the human body becomes diseased when its organs, instead of supplying the body's needs, become the tyrants and parasites of the whole system.” (ibid. pp. 13-14)

参考文献

- 池上淳『生活の芸術化』丸善ライブラリー 1993
飯田鼎『ヴィクトリア時代の社会と労働問題』お茶の水書房 1996
キャナダイン, デヴィッド, 平山雅博, 吉田正弘訳『イギリスの階級社会』日本経済評論社 2008
合田周平『エコパラダイムの時代』丸善 1993
住吉雅美「マックス・シュティルナーの近代合理主義批判」(3)『北大法学論集』第42巻6号 1992
都築忠七『エドワード・カーペンター伝—人類連帯の預言者』晶文社 1985
鶴見和子他編『内発的發展論』東京大学出版会 1989
永井義雄『ロバート・オウエンと近代社会主義』ミネルヴァ書房 1993
二宮厚美「人間発達とコミュニケーション」『神戸大学発達科学部研究紀要』7-3 2000
バジル・ウイリー『十九世紀イギリス自然思想』みすず書房 1985
土方直史『協同思想の形成』中央大学出版部 1993
ラスキン, ジョン木村正身訳『ムネラ・ブルウェリス』関書院 1958
Lewis, Edward, Edward Carpenter: An Exposition and an Appreciation (1915)
Carpenter, Edward, *Civilization: Its Cause and Cure*, London, 1889
Carpenter, Edward, *Commonweal*, 20 April 1890
Carpenter, Edward, *The Healing of Nation*, 1915
Carpenter, Edward, *Towards Democracy* (1st ed.), London, 1883

本稿は、文部科学省の科学研究費基盤研究(C)の助成を受けている。

The Theory of Endogenous Development in Early 20th Century England

— The Thought of Edward Carpenter —

Atsuko INADA

Abstract

The purpose of this paper is to examine the pioneering thought of Edward Carpenter (1844~1929) on endogenous development. Carpenter examined problems occurring in the modern civilized society of England, where modernization first began, since it is widely recognized that the start of the factory system began with the Industrial Revolution in England and that the mechanization which the Industrial Revolution brought in its wake was seen as a threat.

Change in the history of reality, in which nature is included, takes place in extremely long units of 10,000 or more years, and cannot adequately be depicted linearly. Such change takes the form of a composite body of horizontally-divided and multilayered measures of time. An historical awareness founded on these multilayered measures of time lie at the foundation of Carpenter's criticism of civilization.

Key words; Thought of Coexistence, Theory of Endogenous development, Criticism of Modern civilization, Edward Carpenter